

歴史家の目がとらえた三面記事事件 —イヴァン・ジャブロンカ『レティシア』について—

外国語学部 真 野 倫 平

はじめに

本論では、フランスの歴史家イヴァン・ジャブロンカ『レティシア』（2016）の分析を通じて、歴史研究と三面記事事件の関係について考察する。

ジャブロンカは、現代フランスにおいて歴史記述の新たな可能性を開拓し続ける気鋭の歴史家である。著作としては、『歴史は現代文学である』（2012）と『私にはいなかった祖父母の歴史』（2014）がすでに邦訳されている¹。前者は、歴史記述に関する理論的著作であり、古代ギリシア以来の歴史記述の歴史を踏まえた上で、歴史記述の新たな可能性を開拓する試みである。著者は、歴史というジャンルが「科学」と「文学」の境界で袋小路に陥っている現状を指摘し、そのような状況を打開するために、両ジャンルの境界を越えた新たな歴史記述のスタイルの創造を提唱する。後者は、自分が生まれる前にアウシュヴィッツの強制収容所で亡くなった祖父母の生涯を再構成する試みである。そこでは、祖父母の生涯と並行して、歴史家自身の行う調査の過程が語られるという独自のスタイルが取られており、『歴史は現代文学である』で提案された新しい歴史記述の実践例と考えることができる²。

ジャブロンカはこれらの著作に引き続き、フランスで実際に起きた殺人事件を題材にした『レティシア』を発表した。2011年、ナント近郊に住む十八歳の女性レティシアが誘拐・殺害され、遺体がばらばらにされて捨てられた。彼女は幼い頃から家庭環境に恵まれず、双子の姉ジェシカとともに養育施設に、さらに里親家庭に預けられていた。若くて美しい女性が惨たらしく殺されたこともあり、事件はフランスじゅうに大きな反響を引き起こした。さらに、当時の共和国大統領ニコラ・サルコジが、事件の要因として司法による受刑者の追跡調査の不備を激しく批判し、それに反発した司法官たちが史上例のない大規模ストライキを行ったことで、事件は行政と司法を巻き込んだ大論争に発展した。加えて、レティシアの里親のパトロン氏が、姉のジェシ

1 『歴史は現代文学である』真野倫平訳、名古屋大学出版会、2018年。『私にはいなかった祖父母の歴史』田所光男訳、名古屋大学出版会、2017年。

2 『レティシア』のこのような試みは文学的な観点からも高く評価され、その年のメディシス賞とル・モンド文学賞を受賞した。

カを含む複数の里子女性に性的暴行をはたらいたとして逮捕されたことで、事件はさらに世間の耳目を集めることになった。こうしてレティシア事件は、二十一世紀初頭のフランスにおいて最もメディアを騒がせた三面記事事件となった。

ジャブロンカは、この事件を歴史研究の対象として取り上げると宣言する。「私は、三面記事事件を歴史の対象として分析できることを示したい³」。しかし、三面記事として世間を騒がせるのと、研究対象として価値を持つというのは別のことである。ジャブロンカは二十世紀の児童福祉の専門家であり、そのかぎりで被害者の経歴が彼の興味を引いたことは想像に難くない。とはいえ、児童福祉の問題一般を取り上げるのと、ある事件の一被害者を取り上げるのは、研究のアプローチがまったく異なる。彼がことさらにこの事件を取り上げた意図はどこにあるのだろうか。また、『レティシア』は『私にはいなかった祖父母の歴史』と同様に、きわめて独創的な叙述スタイルがとられている。そこでは、被害者の生い立ちと、事件の捜査の進展、さらに著者自身の調査の過程が並行して語られる。ジャブロンカがこのような叙述を用いたことの意図はどこにあるのか。それは彼のこれまでの仕事とどのように関連するのか。それを検討するのが本論の目的である。

1 三面記事事件について

三面記事事件は早くから一部の歴史家や文学者の関心を集めてきた。歴史家ルイ・シュヴァリエは、『三面記事の栄光と悲惨』（2004）において、その歴史を簡単にたどってみせる。「三面記事⁴」（fait divers）という言葉は十九世紀後半に出現した。奇抜な事件が世間を騒がせることは古来より存在したが、十九世紀後半の大衆新聞の登場とともに、三面記事は新聞の売り上げを支える重要な存在になり、その影響力も飛躍的に増大した。二十世紀後半、一部の研究者は、定義上「雑多」であるはずの三面記事にある種の社会的重要性を認めるようになった。シュヴァリエはジャン＝ポール・サルトルのある雑誌記事⁵を援用しつつ、三面記事の役割についてこう述べる。それは、社会の異常や変化を映し出す鏡としての機能を果たしているというのだ。

3 Ivan Jablonka, *Laëtitia ou la fin des hommes*, Seuil, 2016, p. 8. 以下、同書についてはLと略記する。

4 日本語の「三面記事」に相当するフランス語fait diversは「雑多な事件」を意味する。本論では基本的に記事を指す場合は「三面記事」、事件を指す場合は「三面記事事件」とした。

5 『ル・ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』誌1964年11月19日号の「アリバイ」と題された記事。L'OBSサイトで閲覧可能（最終閲覧日：2020年2月1日）。<https://www.nouvelobs.com/culture/20041109.OBS1077/nouvelobs-com-reedite-le-1er-numero-de-l-obs.html>

詰まるところ、サルトルのこのような発言は、三面記事事件についての暗黙の理論に基づいている。その理論とは、三面記事事件は何らかの異常あるいは混乱の徴候として理解でき、それを解析することによって、ある社会内部の不均衡や基調を、その価値体系や社会的関係の体系において生じている長期的な変化（性的なものに関わる偽善の強制力は、今日、三十年前よりも弱いだろうとか、父の権威はもはや昔日と同じ不可侵という性質は持っていないだろうとかいったこと）として知ることが可能になる、というものである。換言すれば、新聞の三面記事欄は、そのような諸体系が変異や無規律状態と名づけるものの社会的実相を、あまねく反映しているということになるだろう⁶。

とはいえ、この社会を映し出す鏡は、どの程度まで対象に忠実なのだろうか。ロラン・バルトは「三面記事の構造」（1964）において、三面記事のテキストに特有の構造を追究する。三面記事はその役割上、読者に驚きをもたらす必要があり、そのためにその因果関係には常にある種の偶然性が混ぜ合わされる。他方で、どれほど偶然のめぐり合わせに見える出来事も、意外性の効果をもたらす一定の秩序に裏づけられている。三面記事はこのような偶然と必然のあいだの微妙なバランスの上に成立するのであり、そのかぎりで独自の「閉じた構造」を持つ。この自己完結性が三面記事に独自の「文学」性を与えるとともに、それを現実から遊離したものにする。

偶然の介入する因果関係、秩序立った偶然のめぐり合わせ、この二つの運動の結合によって三面記事は成立し、じじつこれらは二つとも最後にはある曖昧な領域にまで及ぶことになり、そこではできごととは記号として十全に生きられるけれど、その記号の内容はしかし、不確かなままなのである。このときわれわれがいるのは、もしお望みなら、意味の世界ではなく、意味作用の世界だといってもいい。こうしたありようはおそらく文学のありよう、つまり意味が定められると同時に、はぐらかされもする形式上の秩序ということであって、たしかに三面記事は文学にちがいないのだ、たとえその文学が劣悪だと見なされているにしても⁷。

このような意味作用における人為的性格が、三面記事にまた別の機能と目的を与え

6 ルイ・シュヴァリエ『三面記事の栄光と悲慘』小倉孝誠・岑村傑訳、白水社、2005年、p. 163-165.

7 『ロラン・バルト著作集5 批評をめぐる試み 1964』吉村和明訳、みすず書房、2005年、p. 292.

る。ピエール・ブルデューが『メディア批判』で指摘するように、それはメディアが真に重要なものから目をそらすための「気晴らし＝牽制⁸」(diversion)として機能する。たとえばテレビは、三面記事に多くの放送時間を充てることで、市民が民主的権利を行使するうえで必要な適正な情報を排除している。その意味で三面記事は、現代のメディアが行使する象徴暴力を代表するものといえる。

最後に、歴史家ドミニック・カリファは『インクと血』(1995)において、三面記事が現代社会において、単に社会の病理や混乱を反映するものでも、あるいは無意味な気晴らしや娯楽でもなく、社会を構成するうえでより積極的な機能を果たしていると指摘する。すなわち、巨大メディアが広く流通させる犯罪の情報は、社会の法や規律を無意識のうちに内面化させるための、国民に対する一種の巨大な教育装置として機能しているのだ。

デュルケムが考えるように犯罪が社会的非難という点からしか定義されないとすれば、そしてそれが「公衆衛生の要因」さらには「社会進歩の兆候」であるならば、その物語は単にカタルシスや気晴らしの道具ではなく、社会的意識の重要な「調整」方法であり、集団的教育の実際的な形式なのである。日々、犯罪や非行を日常の慣行とは少し異質な恐怖や魅惑の対象とすることで、規範を教え法律を広めることで、監視の権利と管理の手続きを法令上で制定して権威を正当化することで、これらの物語は、産業秩序が文明の合理性の中に次第に統合されることを語っているのである⁹。

以上のように、三面記事は現代社会にさまざまなかたちで影響を与えている。罪のない娯楽であれ、政治的な目くらましであれ、道徳的な教育装置であれ、それは大衆の意識を方向づける役割を果たしている。そのような状況において、ジャブロンカは三面記事事件をどのように扱おうとするのだろうか。

8 「しかし、雑事件〔三面記事〕というのは、気を紛らわせるものでもあります。魔術師の基本的な心得には、自分がやっているのとは別のことに人びとの注意をひきつけるというものがあります」(ピエール・ブルデュー『メディア批判』櫻本陽一訳、藤原書店、2000年、p. 25)。

9 Dominique Kalifa, *L'encre et le sang. Récits de crimes et société à la Belle Epoque*, Fayard, 1995, p. 303-304.

2 歴史的＝社会的アプローチ

メディアは事件のスキャンダラスな性格を誇張し、それを「三面記事という死のスペクタクル¹⁰」に変貌させることで、読者の関心を引きつける。しかしジャブロンカはあくまで歴史家＝社会学者として、レティシア事件を客観的な観点から分析しようとする。一つ一つの犯罪は偶発的な出来事であるが、歴史的＝社会的観点から見れば、同時代の社会が生み出した必然的な帰結でもあるのだ。ジャブロンカは、現代のメディアにおける三面記事のあり方に対抗する自らの戦略を以下のように説明する。

三面記事、新聞で見かけるこのささやかな野獣の伝説、このセンセーショナルな見かけだおしを、われわれは歴史学と社会学の鋭敏な調査を用いて打ち砕くことができる。まず、〈事件を理解すること〉——その個人的、集団的な重要性を、警察や司法やメディアの領域において明らかにすること。[…]

つぎに、〈事件を開くこと〉——それが一つの犯罪に還元されるものではなく、より広い何かにつながるものであると示すこと。[…]

最後に、〈事件を消し去ること〉。被害者をその死から解放するため、被害者を元どおりにするために、結末を忘れること¹¹。

『レティシア』の特徴の一つは、被害者を対象の中心に据えている点である。トルーマン・カポーティ『冷血』、ノーマン・メイラー『死刑執行人の歌』など、実際の犯罪を題材とする作品は数多くあるが、これらの主人公はあくまで犯罪者その人である。まれに見る残虐な犯罪行為を行った彼らは、その意味で特殊な人間であり、その特殊性が彼らを注目に値する特権的な対象にする。それに対して被害者は、犯罪者によって偶然選ばれた存在であり、その意味で犯罪の二次的な細部にすぎない。ジャブロンカはあえてレティシアを中心に置くことで、彼女を犯罪への従属から解放し、個人としての尊厳を取り戻そうと試みる。「私の本のヒロインはただ一人、レティシアである。われわれが彼女に関心を寄せることで、彼女は不遇の状態を逃れ、自分自身に立ち返り、尊厳と自由を取り戻すことができるだろう¹²」。

他方で、歴史的＝社会的観点からすると、レティシアが犠牲者に選ばれたのはかな

10 L, p. 146.

11 L, p. 348-349.

12 L, p. 8.

らずしも純粋な偶然とは言いがたい。彼女たち姉妹は幼い頃から不安定な家庭状況の中で常に暴力にさらされてきた。幼くして両親が離婚し、父親は刑務所に、母親は精神科病院に入り、残された姉妹は施設に、さらに里親のもとに預けられた。そのような状況が、彼女が犯罪に巻き込まれる条件をある程度準備したといえる。その意味で、レティシアの運命は、現代社会において多くの子供や女性が置かれた疎外的状況を反映している。「それどころか、レティシア事件の陰にあるのは人間性の深淵とある種の社会状況である——すなわち、家族の解体、子供たちの無言の苦しみ、早くから社会に出る若者たち、そしてさらに、二十一世紀初頭のフランスの貧困層、都市周辺地域、社会的不平等¹³」。

それゆえに、この事件を分析するためには、その背景にある社会のあらゆる側面——政治・社会・歴史・文化など——を把握する必要がある。三面記事事件の分析は、かつてリュシアン・フェーヴルが歴史に要求したような、真に総合的な社会の理解を前提とするのだ。「私が主張したいのは、三面記事事件を歴史の対象として理解するためには、社会、家族、子供、女性の置かれた条件、大衆文化、さまざまな形の暴力、メディア、司法、政治、市民社会の空間に目を向けねばならないということだ¹⁴」。そのためにジャブロンカは『レティシア』において、事件に関わるあらゆる社会的・政治的・歴史的・文化的背景——教育扶助制度、司法制度、ジェンダーの問題、太平洋沿岸地域の産業構造、都市周辺地域の日常生活、若者のメディアの活用など——を詳細に分析する。一つの三面記事事件の分析が最終的に四百ページ近い大著になったのはそのためである。

ジャブロンカの歴史的＝社会的分析の一例を取り上げよう。著者は、地理学者クリストフ・ギリユイの分析を援用しつつ、レティシアや殺害犯メイヨンが暮らす都市周辺地域の社会構造を分析し、そこにある階級格差の拡大、下層階級の不安定な生活を指摘する。このように考えると、レティシア事件は、今日のフランスの都市周辺地域のいびつな社会構造が生み出した事件とも考えられる。

このような田舎や沿岸部の庶民階級がクリストフ・ギリユイの言う「周縁のフランス」を形成するとすれば、レティシア事件は「下層白人」における殺人事件——より正確には、「下層白人」のあいだで、挫折した最貧困階層の男が、男性中心主義的な欲求不満と社会的復讐心から、社会に適応した勤勉な最貧困階層の

13 L, p. 8.

14 L, p. 347.

娘を襲った事件——ということになる¹⁵。

ジャブロンカはさらに、事件の背景である大西洋沿岸地域の経済的分析を展開する。たとえば、メイヨンやレティシアの家族はナントの貧困地域で生まれ育った。それに対して、造船会社の社員から教育支援員に転身したパトロン氏の経歴は、ロワール川流域のさびれゆく工業地帯から活動的な沿岸地帯への上昇を示している。双子姉妹は両親のもとを離れボルニックのパトロン家に預けられることで、社会的・経済的な上昇をなしとげようとした。このように、彼らの移動の道筋は、彼らの社会的地位の変化を反映している。

とはいえ、双子姉妹の社会的上昇の背後には、里親による性暴力という代償が隠れていた。男性の女性に対する性暴力が、『レティシア』の重要なテーマである。レティシアの殺害が犯人による性暴力を含むことは言うまでもないが、指摘される性暴力はこれだけではない。ジャブロンカは、レティシアの殺害と、彼女の父親の母親に対する性暴力、里親の里子たちに対する性暴力、さらに共和国大統領による彼女の死の政治的利用、この四者に共通する要素を見いだす。それは男性の女性に対する専制的支配である。

レティシア事件は、二十一世紀における墮落した男性性、男たちによる専制、ゆがんだ父性がもたらす脅威を示している。家父長制はいまだに死に絶えていない——（1）アルコール中毒の父親、逞しい男性、大げさで感傷的な三文役者。（2）下劣な父親、あけすけな視線の倒錯者、片隅で身体を撫でまわす模範的父親。（3）麻薬中毒のやくざ、ほら吹きで身勝手に、決して父親にはなれない男、素手の処刑人。（4）最高権力者、国家元首、大統領、意思決定者、招待者。アルコール性譫妄と、偽善者の悪徳と、暴発的殺人と、犯罪ポピュリズム——四つの文化、四つの男性性の腐敗、暴力を英雄視する四つの方法である¹⁶。

ジャブロンカはこのようにして、社会のあらゆる領域——政治やメディア、労働や消費、教育や文化など——にひそむ抑圧的なジェンダー構造を浮かび上がらせる。著者が最終的に解明しようとするのは、単なる三面記事事件の真相ではなく、このような現代社会の差別的構造と、それを生み出した歴史的背景なのである。その意味で

15 L, p. 145.

16 L, p. 335.

『レティシア』は、ミクロな世界の分析を通じて背景の社会全体を描こうとする、歴史におけるミクロストリアや社会科学における「厚い記述」の試みに通じるものがある¹⁷。

3 叙述スタイル

続いて、『レティシア』の叙述スタイルの特徴を検討することにしよう。ジャブロンカは『歴史は現代文学である』において、歴史家が自らのアトリエを読者に開放することを勧めていた。すなわち、歴史家は自らの調査の結果だけでなく、調査を行う自分自身の姿そのものを読者の目にさらすべきだというのだ。

それは、建築物全体がいかにして自らを支えているかを見せてくれる。研究は、その全体——構造、建築物、割り型——において、その作業〔トラヴァイエ〕の持続（木材が「変形〔トラヴァイエ〕する」と言うように）において、その生成や実現や未完成の厚みにおいて、引き渡される。なぜなら研究は、それ自体が従う知的手続きのみならず、それ自体がかつて引き起こし、今も引き起こし続けているさまざまな困難と、切り離せないからである¹⁸。

『私にはいなかった祖父母の歴史』では、祖父母の生涯と、歴史家の調査の過程が並行して語られる構成がとられていた。『レティシア』における叙述スタイルは、さらに複雑なものになっている。同書は、著者自身が述べるように、捜査員たちの捜査やジャーナリストたちの取材に基づいた「メタ調査」という性格を持っている。それゆえにその叙述においては、捜査員やジャーナリストたちの捜査や取材の過程と、ジャブロンカ自身による歴史家＝社会学者としての調査の過程が重なり合いながら進行する¹⁹。

17 ジャブロンカは『歴史は現代文学である』において、これらの方法の現実把握能力を高く評価している。「ジョヴァンニ・レーヴィのミクロストリアやクリフォード・ギアツの『厚い記述』に価値があるのは、それらが『真実の』細部 […] を大量に集めているからではなく、意味の構造を解明しているからである」(Ivan Jablonka, *L'histoire est une littérature contemporaine. Manifeste pour les sciences sociales*, Seuil, 2014, p. 127 / 邦訳p. 102. 以下、同書についてはHLCと略記する)。

18 HLC, p. 296 / 邦訳p. 249.

19 ジャブロンカはすでに『歴史は現代文学である』において、研究者の仕事と司法官やジャーナ

具体的には、そこでは主に(1)双子姉妹の誕生から事件に至るまでの生い立ちと(2)事件発覚以後の捜査と裁判の経過が並行して語られるが、その合間合間に(3)著者自身による調査の過程が断片的に挿入され、さらに終盤の裁判のくだりにおいて(4)捜査によって再構成された殺害の前後の状況が仮説として提示される。これらの要素が細分化され五十七の章に緻密に配分されることにより、事件が多角的な角度から浮かび上がる構成になっている。

『レティシア』は、犯罪捜査のドキュメンタリーとして読むことができる（そこには推理小説を読むような知的興奮も欠けていない）だけでなく、フランスの現代社会についての社会学的考察としても、あるいは各主要人物が織りなす家族の物語としても、さらには歴史家＝社会学者の調査の記録としても読むことができる。ジャブロンカはこうして、三面記事事件を通じて社会を分析する新たなスタイルを創造したうえで、それを「現実についての文学」の諸ジャンルに関連づける。

三面記事事件を大衆的な悪趣味のシンボルとか下級ジャーナリズムのしるしとして軽蔑するのではなく、その民主的な可能性を思い起こそう。それは人々を感動させ、そしてとりわけ、人々のことをわれわれに語る。それゆえに三面記事事件〔*human interest stories*〕は、いわゆる「人文」〔*humaines*〕諸科学——対象と形式の双方にかかわる調査——の素材そのものになりうるのだ。そのとき三面記事事件はフィクションの方ではなく、現実についての文学——社会科学が主導するあの世界の開拓——の方へと引き寄せられる²⁰。

「現実についての文学」とは、旅行記、ルポルタージュ、回想録、自伝、日記、証言などの現実に着した文学ジャンルを指す。ジャブロンカは『歴史は現代文学である』において、これらのジャンル——文学的観点ではしばしばマージナルなジャンルとされる——の現実把握能力を高く評価していた。彼の考える「現実についての文学」は、フィクションか現実かという基準ではなく、世界を認識し説明する能力の有無によって定義される。「この文学は、その対象（「事実」）やその欠如（「ノンフィクション」）によって定義されるのではなく、その理解への欲求や潜在的な説明能力によって定義

リストの職務のあいだにある種の共通性を指摘していた。「研究者は、ジャーナリストや司法官と並んで、真理についての言説を公的に担いうる限られた存在の一つである」(HLC, p. 319 / 邦訳p. 271)。

²⁰ L, p. 349.

される²¹。『レティシア』の複雑な叙述スタイルは、調査の過程そのものを読者に開示するとともに、その方法論について再考をうながすための手段なのである。

捜査員の捜査や犯人の供述にもかかわらず、この事件には——あらゆる歴史上の出来事と同様に——最終的に数多くの不明な点が残された。たとえば、レティシアが残した遺書が意味するものや、彼女が殺害犯についていった理由や、彼女の死の瞬間の様子などである。ジャブロンカは、これらの不明な点について、そこを想像力で埋めるのではなく、ありうべき論理的仮説というかたちで複数の可能性を提示してみせる。「レティシアの苦悩を理解するために、そして彼女の声が永遠に途絶えたがゆえに、方法としてのフィクションに訴える必要がある——すなわち、その想像的性格によって魂の秘密に入りこみ、出来事の真相を解明するような仮説に²²」。『歴史は現代文学である』において、「方法としてのフィクション」とは、単なる架空の想像物ではなく、真理の探究において方法的に用いられる論理的虚構を指す。「方法としてのフィクションは、論理を構成するものであり、想像力に比べてより虚構的で、より概念的で、より必要不可欠なものである²³」。それはおのれの認識の限界を見きわめるために、あえて導入されるフィクションであり、記憶の空白をそのままにしつつ、できるかぎり過去に接近するための手段である。

『レティシア』は、実際の事件を題材にする点で、いわゆるニュー・ジャーナリズムやノンフィクション・ノベルの手法を連想させる。ただし、ジャブロンカの目指す「研究としてのテキスト」とこれらのジャンルは完全に一致するわけではない²⁴。たとえば、ノンフィクション・ノベルの代表作の一つであるカポーティ『冷血』と比較してみよう。実際の殺人事件という題材、複数の物語が並行する叙述、証言・会話・裁判記録・関連書類などの多様な資料の引用など、二つの作品には多くの共通点が認められる。とはいえ両者のあいだには決定的な違いがある。『冷血』では語り手が常に不在であり、非人称的な叙述がよどみなく続けられるのに対して、『レティシア』では語り手が現存し、どのような情報を持ち、どのような根拠に基づいて判断を下すの

21 HLC, p. 312 / 邦訳p. 264.

22 L, p. 253.

23 HLC, p. 197 / 邦訳p. 163.

24 ジャブロンカは『歴史は現代文学である』において、ノンフィクション・ノベルとニュー・ジャーナリズムの現実把握能力にある種の限界を指摘している。「一般的に、ノンフィクション・ノベルは『全体的』にしか真実でない」(HLC, p. 231 / 邦訳p. 192)。また、「ニュー・ジャーナリズムは、最終的に小説に改宗したがゆえに、いっそうポスト＝ゾラ的と形容することができる」(HLC, p. 232 / 邦訳p. 193)。

かが絶えず明示される。さらに、読者による検証可能性を保証するために、巻末に関連資料が示される。ジャブロンカはこのように、調査の手続きそのものを開示することで、社会科学としての一線を堅持しようとするのだ。

おわりに

ジャブロンカは『レティシア』において、『私にはいなかった祖父母の歴史』に引き続き、新しい歴史記述のスタイルを生み出した。それは、捜査員やジャーナリストたちの捜査や取材と、ジャブロンカ自身による歴史家＝社会学者としての調査を並行して語りつつ、事件の歴史的＝社会的背景を客観的に解明しようとするものだった。このような複雑な叙述それ自体が、現実を把握するための新たな方法論の試みであると同時に、事件を死のスペクタクルに変貌させるメディアや、それを政治的プロパガンダにしようとする政治家に対する激しい批判でもあった。

研究者自身を表面に出すという同書のスタイルは、研究者と対象のあいだに特定の関係を生み出さざるをえない。それをジャブロンカはこのように説明する。「レティシアはわれわれを必要とする。私は異化作用を用いて、彼女がいかなる点で平凡であると同時に例外的な存在であるか——太陽が多くの星の中でそうであるように——を示すことで、彼女を特別な存在にするだろう²⁵」。研究者にとって研究対象は、一般的な現象を体現するかぎりて研究される価値を有する。レティシアは、現代社会の困難な状況を生きる多くの女性の一人にすぎない。しかし、実際に研究者が彼女を取り上げ、省察を重ねたことで、彼女は研究者にとって唯一無二の存在となった。それはときにある種の疑似家族的な関係として示される²⁶。

研究者の対象に対するこのような個人的な思い入れは、研究の客観性を揺るがすものではないだろうか。しかし、ジャブロンカによれば、そのような考えは十九世紀の科学主義のもたらした誤謬にほかならない。「したがって、歴史における客観性は、自我の消滅や、中立性（あるいはむしろ中立化）や、全知の話者というごまかしとは何の関係もない。それは反対に、話者の立場についての記述——それが彼の仮説に対して個人および集団が批判を行うための前提条件である——の上に成立する²⁷」。む

25 L, p. 346.

26 「彼女は死に、私はまだ生きている。彼女は私の娘でもおかしくない」（L, p. 185）。「ジェシカ、われわれの娘。[...] 彼女がわれわれを赦してくれますように。この本は彼女のためのものだ」（L, p. 337）。

27 HLC, p. 286 / 邦訳 p. 240.

しろ、研究者が対象との関係を明示することこそが、対象を客観的にとらえることの条件なのである——これが、『歴史は現代文学である』や『私にはいなかった祖父母の歴史』以来のジャブロンカの一貫した主張である。

最後に、ジャブロンカのその後の歩みについて触れておこう。彼は2019年に『公正な男性²⁸』を刊行した。これはフェミニズムの問題を、人類学的・歴史的・社会的・文化的観点から扱った研究書であり、その広い視点と現代的な問題提起により大きな反響を呼んだ。男性の女性に対する専制的支配という同書の主題は、『レティシア』から引き継がれたものであり、後者の副題が「男性の終焉」、前者の副題が「家父長制から新たな男性性へ」となっていることも、両者のあいだに発展的な継承があることを示している。同書が現代社会でどのような意義を持つのかも興味深い主題であるが、それはまた別の機会に論じることにした。

付記

本論文はJSPS科研費19K00510ならびに2019年度南山大学パッへ研究奨励金I-A-2の助成による研究成果の一部である。

28 Ivan Jablonka, *Des hommes justes. Du patriarcat aux nouvelles masculinités*, Seuil, 2019.